様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０５５２

研究課題名（和文）訓点資料注釈の作成

研究課題名（英文）Making Notes on Kuntensiryo

研究代表者
大槻　信（Otsuki, Makoto）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：６０２９１９９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：訓点資料に付された訓点をもとに、どのようにして訓読文を作り上げるのか、その過程について具体的な説明が必要であるという観点から、本研究では、特定の訓点資料に対する詳細な注釈を行った。それによって、「訓点資料解読のための手引き」の役割を果たすことを期待している。同時に、若手研究者が資料にアクセスしやすい環境を整え、オープンに議論できる場を設ける必要があるとの観点から、若手研究者に資料調査への参加を促し、資料について議論する機会を設けるようつとめた。

研究成果の概要（英文）：Kuntensiryo is the classical Chinese text with kunten remarks which shows how to read the text in Japanese. In order to understand the way how we translate the Chinese text into Japanese, using kunten remarks, we have to know the way to translate in some specific documents. In this study, I made detailed notes on specific documents to show how to translate.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：訓点資料

１．研究開始当初の背景

訓点資料は日本語の歴史的な研究において、欠くことのできない、極めて重要な資料群である。とりわけ、平安時代の日本語を究明するための資料として、最大の材料を提供してきた。

しかし、日本語史研究、中でも訓点資料研究は現在、停滞期にあると言われる。問題点として指摘されるのは、「資料への近づきがたさ」（閉鎖性・特殊性）と「若手不足」である。特に後者は深刻で、40 歳未満の訓点研究者が見当たらない状況である。京都大学は「訓点語学」発祥の地でありながら、訓点を専門に扱う研究者が長く出ていない。

日本語史や古典文学の研究において、訓点資料を全く利用しないことは、今日ではほとんどあり得ない。訓点資料の調査結果・研究成果はさかんに利用されている。一方で、研究者自身が訓点資料を調査したり、研究したりすることはほとんど行われていない。研究材料としては訓点資料を使用しながら、訓点資料の実物を一度も見たことがないという研究者が大半である。そのため、実際の訓点資料調査がどのように行われ、訓点からどのようにして訓読文が作成されているのかが理解されないまま、研究結果である訓読文だけが一人歩きして、資料として使われている。

しかしながら、訓点はある種のオプションであり、全てが付されるとは限らない。つまり、記入された訓点のみによって完全な日本語文が再現されることはほとんどない。また、複数の訓点がある場合、それらをどの順に読むかは資料に示されない。例えば、「欲」字にヲコト点「に」「ひ」がある場合、それを「欲（ねが）ひに」と読むのは〈解釈〉である。このように、訓点資料の解読においては、補読・推読の必要性がきわめて高い。にもかかわらず、その一々に根拠を示した研究はまだない。解読結果である訓読文は多く表されているが、個々の箇所をなぜそう読むべきなのかは示されていない。

訓点資料はそれとして一つの古典テキストであり、正確な理解を可能にする注釈が必要である。しかし、漢籍はともかく、訓点資料の中心をなす仏書訓点資料については、空海の著作などをのぞくと、十分な語学的注釈が付されたことがない。考察があっても、品詞ごとに一括して説明されていることが多く、初心者には個別的なある箇所をなぜそう読むべきなのかがわからない。そのような状況が、若手の参入を阻んでいる面がある。訓点をもとにどのようにして訓読文を作り上げるのか、その過程について具体的な説明が必要なのである。研究が停滞している現状の中、「訓点資料解読のための手引き」が求められており、手引きとしては具体的な訓点資料に対する詳細な注釈が最も有効であろう。

一方で、「資料への近づきがたさ」を解消するためには、若手研究者が資料にアクセスしやすい環境を整え、オープンに議論できる場を設ける必要がある。そのためには、資料調査への参加を促し、資料について議論する機会を設けることが重要である。本研究に若手研究者（大学院生等）を参画させることで、若手育成にも貢献したい。若手研究者の育成は、研究を将来につなげていくという意味だけでなく、現在の研究レベルを引き上げるためにも必要なことである。

２．研究の目的

○訓点資料の注釈を作成する。
重要度の高い訓点資料について詳細な注釈を作成する。

○訓点資料の原本実地調査を行う。
若手研究者を伴い、京都大学附属図書館・文学研究科図書館ならびに高野山大学図書館を中心に調査する。両者には未調査資料が多くある。

○研究会を組織する。
上記の研究を、若手研究者を伴った共同研究とするため、研究会を組織する。それにより、若手研究者の育成をはかる。

３．研究の方法

本研究では上記の目的を達成するため、以下のような研究を行った。

１．訓点資料注釈の作成
２．原本実地調査（高野山・京都大学）

１．訓点資料注釈の作成

重要資料について詳細な注釈を作成する。本研究の中心となる。

可能である場合には、まず資料の撮影を行い、研究を効率化する。原本・写真にもとづき移点作業（訓点を全てうつしとり記録すること）を行い、それに基づいて、訓読文を作成する。その過程で、できる限り詳細な注釈を付す。その訓読文、注釈を検討するための研究会を組織する。

２．原本実地調査

本研究の一方の中心をなす。高野山、京都大学を中心に、原本を実地に調査することで、書誌的データを得、訓点資料としての実態を調査し、記述する。研究代表者に加え、大学院生等にも参加してもらうことで、研究を加速し、同時に若手育成の効果も上げたい。また、可能な範囲で、資料の撮影も行う予定である。高性能デジタルカメラを用い、また、そのデータを NAS（LAN 接続の大容量 HDD）に蓄積することで、研究を効率化する。

高野山大学図書館は金剛三昧院、真別所、

三宝院、光明院等の山内主要塔頭から図書を寄託されている。寄託本について、資料価値の高いものを抄出した『高野山大学図書館寄託本目録抄』(花野憲道編、1997 年) がある。ただし、これは図書館のカードをもとに摘記したもので、カードには訓点の有無、奥書、正確な書写年代は記されておらず、原本調査の必要性が高い。この目録抄を参考に閲覧書を絞り込んだ上で、年に複数回の調査を行う。同時に、高野山霊宝館、親王院などの各塔頭においても調査を行う。

京都大学附属図書館・文学研究科を中心に京都大学所蔵の訓点資料の調査を行う。月に数回の調査を予定している。

また、調査に並行して情報収集を行う。高野山・京都大学所蔵の訓点資料のうち、すでに研究がなされていたり、言及されている場合がある。それら全てを蒐集し、資料毎に整理したデータベースを作成する。情報の収集に関しては、研究代表者が主導し、入力に関しては大学院生等の助けを得て、データベースを形成する。

研究の各段階においても言及したが、以上の研究の具体的実践を通して、若手研究者の教育・育成を行う。

４．研究成果

【平成２３年度】
□先行研究の集成・整理。
□訓点資料の所在について、予備的な調査（高野山・京都大学)。
□原本実地調査（高野山・京都大学)。
□注釈の対象となる資料についての予備的研究。
□研究会の組織。

平成２３年度は、若手研究者とともに訓点資料の所在について、予備的な調査を行い（高野山・京都大学など)、注釈の対象となる資料の選定を進めた。具体的には、高野山親王院･高野山大学図書館などで、大学院生をともなった調査を行った。また、京都大学文学研究科図書館･京都大学附属図書館では定期的に書庫の入庫調査などを実施した。

そして、その候補資料について予備的研究を行った。具体的には京都大学文学部蔵『金剛頂経』ならびに高野山親王院堯榮文庫蔵三部秘経を中心に研究を進めた。前者は院政期の標準的な仏書訓点資料であり、後者は最古の宝幢院点加点資料の一つであって、ともに価値が高い。

その過程で、調査合宿、研究会などを開催し若手研究者の啓発と教育に努めた。また、京都大学における授業でも訓点資料を取り上げ、高等学校での講演などでも資料紹介をした。加えて、上記の研究に資するため、先行研究の集成・整理を継続した。

【平成２４年度】
□原本実地調査（高野山・京都大学)。
□資料撮影（高野山・京都大学)。
□調査結果の整理と電子化。
□注釈の対象を決定。
□注釈を作成。
□研究会を開催。

平成２４年度は、若手研究者とともに訓点資料の調査･撮影を行った (高野山･高山寺･京都大学など)。具体的には、高野山大学図書館、高山寺などで、大学院生をともなった調査を行い、他にも国際仏教学大学院大学付属図書館やお茶の水図書館等で調査を行った。また、京都大学文学研究科図書館･京都大学附属図書館では定期的に書庫の入庫調査を実施している。

そして、注釈の対象となる資料の選定を進め、京都大学文学部蔵『金剛頂経』ならびに陽明文庫蔵『遊仙窟』を対象として注釈作成作業を行った。前者は院政期の標準的な仏書訓点資料であり、後者は漢籍の訓点資料として特異な訓読が見られる。

その過程で、調査合宿、研究会などを開催し、若手研究者の啓発と教育に努めた。京都大学における授業（演習）でも訓点資料を取り上げ、若手の関心喚起に努めている。加えて、上記の研究に資するため、先行研究の集成・整理を継続している。所属大学で十分な情報が得られない場合には、国立国会図書館等で情報収集にあたっている。また、研究成果を世界に発信するため、既発表論文の中国語翻訳を進めた (『敦煌学･日本学　続編』(上海辞書出版社、2013 年刊行予定）に掲載、平成 25 年度参照)。

【平成２５年度】
□原本実地調査（高野山・京都大学)。
□注釈を作成。
□注釈を検討。
□注釈を整理、統合。

平成２５年度は、若手研究者とともに訓点資料の調査･撮影を行った (高野山･高山寺･京都大学など)。具体的には、高野山大学図書館、高山寺などで、大学院生をともなった調査を行い、他にも久遠寺・国際仏教学大学院大学付属図書館・国立国会図書館・国立国語研究所等で調査を行った。また、京都大学文学研究科図書館･京都大学附属図書館では定期的に書庫の入庫調査を実施した。

そして、京都大学文学部蔵『金剛頂経』ならびに陽明文庫蔵『遊仙窟』を対象として注釈作成作業を行った。前者は院政期の標準的な仏書訓点資料であり、後者は漢籍の訓点資料として特異な訓読が見られる。前者については注釈作成をほぼ完了し、後者についてもその前半を完成した。

その過程で、調査合宿、研究会などを開催

し、若手研究者の啓発と教育に努めた。京都大学における授業（演習）でも訓点資料を取り上げ、若手の関心喚起に努めた。加えて、上記の研究に資するため、先行研究の集成・整理を継続している。所属大学で十分な情報が得られない場合には、国立国会図書館・国文学研究資料館等で情報収集にあたった。

また、研究成果を世界に発信するため、既発表論文の中国語翻訳を進め『敦煌学・日本学 続編』（上海辞書出版社、2013 年）として掲載されたほか、2013 年 12 月に復旦大学（中国・上海）で行われた 2013 国際ワークショップ「日本“訓読” その歴史及び変化」にて「日本訓点資料提要」と題して講演を行った。

本研究は、早くからその必要性が認識されながら、現在まで作られずに来た「訓点資料解読の手引き」を作成しようとする点に特色がある。また、それを「注釈」という形で実現しようとする点に独創性がある。同時に、研究の過程で、若手研究者を育成し、未調査資料の開拓を心がけた。

文学研究において、注釈という営みが契機となって、それぞれの古典に新たな光が当てられ、研究が促進されてきた。本研究においても、訓点資料に詳細な注釈を付すという営みを通して、これまで気付かれずにきた多くの問題点が見出された。

今後の展望としては、本研究の成果が訓点資料研究、ひいては日本語史研究の底上げと活性化に大きな貢献をなすことを期待している。

以下に、例として、京都大学文学部蔵『金剛頂経』巻第三（奥書：「永治二年二月廿八日移點已了　沙門長契」（永治二年 1142）、本文書写：平安時代院政期書写・加点、訓点：朱点（仮名、ヲコト点・西墓点　永治二年 1142））の冒頭１オに対する注釈を示す。

【以下、注釈例示】

▲次（に）當[1]（に）廣[2]（く）金剛弟子を[3]金剛大曼荼羅に入るる[4]儀軌を説く（へし）［當（再読）］。中（に）於（て）[5]、我

▲先つ盡-无餘（の）有情[6]界をして拔濟し利益し安樂する・最勝

▲悉地の因果に入ら令む（る）か[7]故に此の大曼荼羅に入（る）ことを説かむ[8]。是器（と）非器[9]（とを）簡擇[10]す（べから）［應］（す）［不］。

▲何（を）以（ての）故（に）[11]、世尊 、或

---

[1] 「當」　再読字。再読字については小林芳規 1954.03 参照。「當」「将」は、平安時代初期には単読（ベシ・ム）であるが、中期以降は仏書も漢籍も再読されるのがふつうである。ここはヲコト点を欠くが、「マサニ―ベシ」と再読して良かろう。逆に言えば、特に訓点を付すまでもなく、そのように読まれたことになる。２オ６「當に」。9 オ２「則（ち）當に伏藏を見（る）（べ）し」。高山寺②104『金剛頂一切如来真実攝大乗現證大教王経』巻第三・康平６年 1063 円堂点「（まさ）に……（へ）し」。

[2] 「廣」字補入。

[3] 金剛弟子を　ヲコト点「を」があり、「金剛弟子を……入るる」と呼応してるが、本来は主格として、「金剛弟子の……入る」と訓むべきか。

[4] 「入るる」　「イル」との違い。四段と下二段。下二段活用で他動詞的意味を表す。下二段（他動）―四段（自動）の対は多い。イルとハイル。ハイルは「這ひ入る」から。中世以降に見られるが、近世にいたるまで「這ひ」の意義を濃厚に伴う。

[5] 「中にして」あるいは「中に」と訓むべきか（築島慈恩伝研究：307）。高山寺②104『金剛頂一切如来真実攝大乗現證大教王経』巻第三・康平６年 1063 円堂点「於（コレカ）中に」。

「於」字を「にして」「におきて（おいて）」どちらに訓むべきかについては、大坪文法：505-506 ならびに大坪併治 1965.02 参照。「にして」がつく名詞は具体的で、場所を示すものが多く、意味は「……ニアッテ」という存在を示す。一方、「において」は抽象的な名詞が多く、「……の中で」「……について」など多様な意味を表す。

[6] 「有情」　『織田』「Sattva 梵語、薩埵。旧訳「衆生」。情識あるもの。愛情あるもの。総じて動物に名く。」

[7] 「令む（る）」or「令（め）む」。「シムルガ故」（中田点研 1954 訳文：275-14）の例もあり。

[8] 符号「一・二」については、小林芳規「返点の沿革」、訓点語と訓点資料、054、1974 参照。

[9] 是器非器　「施時不見是器非器。不択日時是処非処」（大般涅槃経）

[10] 高山寺②104『金剛頂一切如来真実攝大乗現證大教王経』巻第三・康平６年 1063 円堂点「カンチヤク」。

[11] 「何（を）以（ての）故（に）」。経典に頻出。『仏教漢文の読み方』：78-83。「文として独立している問いかけの場合が多い。」「ある一つの事実や、教えを述べてきて、「では、それはどういうわけか」とあらためて問いかける口調だと考えてよい。」（：

は[12]有情の大（おほき）なる罪を作れる者有り。彼[13]此の金剛界の（１オ）

【以上、注釈例示】

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　7 件）

1. 大槻信、「絶品絵 ――慧友筆高山寺重宝目録――」、2014 年 3 月、平成二十五年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集、高山寺典籍文書綜合調査団、58-63、査読無
2. 大槻信、"古辭書與和訓―新撰字鏡〈臨時雑要字〉―"、2013 年 11 月、『敦煌学・日本学 続編―石塚晴通教授古稀紀念論文集―』（中国語版）上海辞書出版社、270-290、査読無
3. 大槻信、「語彙史」、2013 年 4 月、『国語史を学ぶ人のために』木田章義編、世界思想社、71-98、査読無
4. 大槻信・小林雄一・森下真衣、「『新撰字鏡』序文と『法琳別伝』」、2013 年 1 月、国語国文、第 82 巻第 1 号、34-48、査読有
5. 大槻信、「2010 年・2011 年における日本語学会の展望　研究資料（史的研究）」、2012 年 7 月、日本語の研究、第 8 巻 3 号、9-13、査読無
6. 石塚晴通・大槻信、「勧修寺蔵金剛頂大教王経頼尊永承点（第二）釈文稿」、2012 年 7 月、勧修寺論輯、8 号、左 1-21、査読無
7. 大槻信、「願海書志」、2011 年 9 月、訓点語と訓点資料、第 127 輯（築島裕博士追悼号）、44-64、査読有

〔学会発表〕（計　1 件）

1. 大槻信・小林雄一・森下真衣、「『新撰字鏡』序文と『法琳別伝』」、2012 年 5 月、訓点語学会（於京都大学）

６．研究組織
(1)研究代表者
大槻　信　（OTSUKI Makoto）
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：60291994

---

81)。「何（を）以（ての）故（か）。」と独立した文にしても良いかもしれない。高山寺②104『　金剛頂一切如来真実攝大乗現證大教王経』巻第三・康平６年 1063 円堂点「何を以の故に」。

[12] 「或」　アルハ・アルイハ？　『日本国語大辞典』Ⅰ：673「平安初期には、おおむね「ある人が」の意には「あるいは」、「ある場合は」の意の接続のときは「あるは」と読み分けていた。しかし平安中期以降は接続の場合も「あるいは」にとって代わられた。」

[13] 高山寺②104『　金剛頂一切如来真実攝大乗現證大教王経』巻第三・康平６年 1063 円堂点に「彼れ」高山寺①1［２］『金剛頂経』巻三・寛治二年 1088 点に「彼れ」。